The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	ジレンマ判断課題における共感のバイアス : 功利主義判断に及ぼす影響について
Author(s)	高松, 礼奈
Citation	対人社会心理学研究. 2018, 18, p. 53-59
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/70541
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

ジレンマ判断課題における共感のバイアス

—功利主義判断に及ぼす影響について—

高松　礼奈(名古屋大学大学院教育発達科学研究科)

本研究は、人身的ジレンマを判断課題に使用し、多くの人びとを救うことを目的とした特定の他者への危害の肯定に影響を与える要因として共感を検討した。そこで、犠牲となる特定の他者に対する共感を操作し、危害の肯定率に変化が生じるか質問紙実験を行った。結果、犠牲者に共感しにくい社会的属性をフレーミングしたところ(低共感条件)、直接的危害を与える功利主義判断をする傾向が高くなった。また、犠牲者に共感するよう教示してから判断課題を行なったところ(高共感条件)、危害を与える功利主義判断をする傾向が低くなった。このことから、ジレンマ状況において、共感を操作するフレーミングは功利主義判断に影響を及ぼすことが示された。

キーワード：功利主義判断、共感、危害の肯定、人身的ジレンマ

問題

人生には、さまざまな選択肢がある。人びとは、その時々で最善の選択をしようと努める。しかし、1 つに決めることがきわめて難しい場合がある。2 つ以上の同等に好ましくない選択肢のいずれの選択を迫られており、どちらを選んでも、失うものも得るものもある状況をジレンマ(dilemma)という。特に、2 つ以上の道徳的規範の対立する場面は、道徳ジレンマと呼ばれる。

道徳ジレンマは 2 つに大別され、より多くの人を助けるために、特定の人物に死傷を与え(例： 橋から突き落とす)、多数が受けるはずだった死傷を防ぐ（例： 暴走トロッコは大柄な人に接触して停止する）状況は、人身的(personal)、もしくは高葛藤(high-conflict)のジレンマと呼ばれる。一方、より多くの人を助けるために、ある 1 人に間接的危害(例： 暴走トロッコの進路を変えるスイッチを押す)を加えることを要する状況は、非人身的(impersonal)、もしくは低葛藤(low-conflict)のジレンマと呼ばれる。

本研究は、人身的ジレンマ状況における判断プロセスを検討するために、犠牲となる他者に対する共感を操作し、人身的ジレンマにおける功利主義判断が方向付けられるか調べることを目的とする。

共感とジレンマ状況における判断

一連の研究により、ジレンマ課題では、情動的な共感に分類される共感配慮が直接的危害を回避する判断に影響することが明らかとなった（Choe & Min, 2011; Gao & Tang, 2013; Gleichgerrcht & Young, 2013; Greene, Sommerville, Nystrom, Darley, & Cohen, 2001; Koenigs et al., 2007; Takamatsu & Takai, 2017）。しかし、(a)課題遂行者はジレンマ状況の「誰に」共感を感じて、功利主義の判断材料に使っているのか、(b)サイコパス特性の高い者が功利主義的な判断を選ぶのは、犠牲者に対する共感の欠如なのか、より多くの人を救うことに注意が向いているからなのか、十分に検討されていない。

共感と注意バイアス

共感は良いものだと一般的に思われているが、共感には不公平な側面(partiality)がある。共感は、特定の他者に限定して向けられることが多い。われわれは，ある状況下ですべての人に対して，平等に共感を感じない。ある人に共感が向けられるとその人が優先され、同じ境遇の他者は思いやりや配慮の対象から外される(Batson, Turk, Shaw, & Klein, 1995)。血縁者、親近性の高い人や身内(内集団)が苦しんでいるのを見ると、人びとはコストが高くても苦痛を取り除こうと努める(Decety & Jackson, 2004)。一方、 関わりのない他者、外集団(よそ者)、嫌悪感情を抱く人(例：ホームレス、薬物中毒者)が苦しんでいるのを見ても、共感はおろか特別な感情を抱かない(Cikara, Bruneau, & Saxe, 2011)。このように人びとはある状況で、不幸な立場の人びとに分け隔てなく共感するのではなく、共感のしやすい相手に共感を限定している。

他視点取得

他視点取得は、苦しんでいる人に共感を抱く方法の 1 つである(Davis et al., 2004; Vreeke & van der Mark, 2003)。一般的に、共感を喚起する実験操作では、ターゲットの心情や考えていることを想像し、その人の視点から物事をみるよう指示する(e.g., Batson et al., 1995)。他者の視点に立つと共感を覚え、多少の犠牲を払ってでも他者のために利他的に行動する(Batson & Shaw, 1991)。共感すべき相手の心情に注意を向けるように他視点取得の教示を呈示すると、自己中心的で普段は共感しない人でも、共感を感じることができる(Hepper, Hart, & Sedikides, 2014)。したがって、ある人に共感をする場合、その人の心情、置かれている状況や苦しみに注意を向けることが、他視点取得をする前提条件として

考えられる。

本研究の目的と仮説

本研究は、犠牲となる他者に対する共感を操作することで、ジレンマ状況における判断課題が影響されるか調べることを目的とする。仮説は以下の通りである。

仮説 1 犠牲となる他者に対する共感は、道徳ジレンマ状況における功利主義判断に影響する。

具体的には、共感を喚起させられると（高共感条件）、功利主義判断をする傾向が低くなる。一方、犠牲者の属性が共感を感じにくい低共感条件(例: 人間性がないと知覚される人、感情経験のない人、軽蔑に値する人)では、参加者は、その人に直接危害を加えて、多くの人を助ける功利主義判断を選ぶ傾向が高くなる。

仮説 2 ジレンマ状況では、共感している相手によって判断が依存する。

具体的には、ジレンマ状況で犠牲となる特定他者に共感していると、彼・彼女に危害を与えることを肯定する功利主義判断をする傾向が低くなる。対照的に、特定他者を犠牲にすることで助かる多くの人びとに共感をしていると、功利主義判断をしやすくなる。

方法

参加者

Amazon の Mechanical Turk を用いて回答者を募集した。参加条件として、1) 英語がネイティブレベルであること、2) ジレンマ課題をこれまでにしたことのない人とした。1 は、第二言語でジレンマ課題をすると功利主義寄りになるためで(Cipoletti, McFarlane, & Weissglass, 2015)、2 は練習効果を懸念したためである。

さらに、手抜き回答を除外するために、Qualtrics のタイマー設定をした。タイマー設定により、参加者が指定項目に〇秒費やしたのか測定できる。反応時間とジレンマ課題のパフォーマンスを調べた Suter & Hertwig (2011)によると、大学生回答者は、ジレンマのシナリオを 1 つ読み、判断課題をするのに、「好きなペースでやるように」と教示されると、少なくとも 32 秒は要する。そこで、本研究では、オンライン調査の回答時間が 5 分以下だった者のデータは除外した(不良回答＝25)。分析対象となったのは、111 名(女性＝70 人、男性＝41 人)、平均年齢は、40.68 歳であった(*SD*=13.05; range = 21−75)。人種構成は、白人(74.8%)、黒人(9.0%)、ヒスパニック(7.2%)、アジア系(5.4%)、その他(3.6%)であった。

手続きと研究デザイン

Qualtrics でオンラインアンケートを実施した。実験デザインは、1要因 3 水準参加者内計画であった。

ジレンマ課題

シナリオは、人身的ジレンマ 2 つ(歩道橋、救命ボート)を用いた。Greene, Nystrom, Engell, Darley, & Cohen (2004)によると、これら 2 つのジレンマは、共通して感情的負荷の大きい一方で、歩道橋のジレンマでは功利主義判断の割合がきわめて低い。

まず、「これからいくつか短いシナリオを読んでもらいます。それぞれのシナリオは似ていますが、重要な点で異なっていますので、しっかり読んで下さい。次のページでは、シナリオに関する質問があります」と教示を提示した。そして、回答者が準備できてから、「次へ」ボタンをクリックし、課題を開始してもらうようにした。ジレンマのシナリオは、参加者ごとにランダムな順序で提示されるよう設定し、カウンターバランスをとった。

判断 「ここで、〇〇(より多くの人)を助けるために、□□(特定他者に直接的危害)をすることは道徳的に適切ですか」という問いに、「いいえ(1)」〜「はい(6)」の 6 件法で判断を求めた。得点が高いほど犠牲者に危害を加えて多くの人を助けることに肯定する功利主義判断を表す。

実験操作（高共感） 高共感フレーミングでは、危害の対象となる人に共感を向けさせるため、先行研究(Davis et al., 2004; Hepper et al., 2014; McAuliffe, Forster, Philippe, & McCullough, 2017) で使用された他視点取得の操作を行った。この教示を読み、視点取得を試みることで、ターゲットに対する共感が高まることが報告されている。本研究では、判断課題の前に「ここで、□□ (直接危害のターゲットとなる人)について考えてみて下さい。この状況下で、彼がどのように感じ、考えるか想像してみて下さい。想像することができましたら、少なくとも 3 つ箇条書きで書いて下さい」と教示した。

実験操作（低共感） ある人に対する共感を高める操作は先行研究で実証されているものの(Davis et al., 2004)、共感を低める明示的操作は検証されていない。人びとは苦しんでいる他者を目の前にすると共感せずにはいられず(McAuliffe et al., 2017), 共感しないほうが不自然と考える(van Baaren, Maddux, Chartrand, de Bouter, & van Knippenberg, 2003)。すなわち、何も操作しなければ、苦しんでいる人に共感することがデフォルトのモードなのである。

他者に対する共感が、偶発的に低下する条件として「客観的なままでいる(remain-objective)」条件がある。この条件では、能動的に客観性を保つよう教示が出される。客観性を保つようにすると、苦しんでいる他者に対する共感が低まることがわかっている(McAuliffe et al., 2017)。一方で、この客観的な思考を維持する操作は、道徳ジレンマ課題ではターゲットへの共感を低くするだけでなく、判断者に熟考するように働きかけて判断プロセスに影響を及ぼす可能性がある。なぜなら、ジレンマ課題の前に熟考するようマインドセットすると、功利主義判

断をしがちになるからである(Paxton, Ungar, & Greene, 2009)。

以上を考慮して本研究では、客観的でいるよう教示するのではなく、危害の対象となる特定他者の属性を操作し共感のしにくいようにした。非人間化や心の知覚の先行研究によると(Gray, Gray, Wegner, 2007; Harris & Fiske, 2006)、犯罪者、ホームレス、脳死患者(i.e., 感情や痛みを経験する能力がないと思われがちな人)は共感されにくい。そこで、歩道橋のジレンマでは、犠牲者となりうる大柄な人を、幼児虐待と殺害の罪に問われた元受刑者とフレーミングした。救命ボートのジレンマでは、犠牲者となりうるケガ人を、強力な鎮静剤を投与されて半分意識のない人とフレーミングした(内容については、付録を参照)。

さらに、参加者の共感を他の人にそらすため、助かる多くの人びとに共感を向けるように教示をした。例えば、歩道橋のジレンマでは、「この大柄な人の犠牲者となった人びとのことを考えて下さい。この人の行いによって傷つけられた人びとがどのように感じ、考えるだろうか想像してから、次ページの質問に答えて下さい。想像することができましたら、犠牲者の気持ちを少なくとも 3 つ箇条書きで書いて下さい」と教示をした。

たら、少なくとも 3 つ箇条書きで書いて下さい」

統制条件 先行研究(McAuliffe et al., 2017)で使用された方法と同じく、統制条件では特別な教示をせずに課題をしてもらった。

ジレンマに登場する人物に対する共感 ジレンマには、直接的危害を受ける特定他者である「犠牲者」、功利主義判断によって、犠牲者への危害の肯定によって助かる「より多くの人」、行為者として「その場にいる自分(あなた)」が登場する。例えば、歩道橋のジレンマでは、功利主義判断によって直接的危害を受ける「見知らぬ大柄な人」、それによって助かる「作業員 5 名」、危害を肯定するか否か選択を迫られる「その状況にいる自分」が登場する。

ある状況において、共感はすべての人に均等に向けられないことから(Batson et al., 1995)、ジレンマ状況における各登場人物にどの程度共感を感じたか、「全く共感しなかった」〜「非常に共感した」の 6 件法で回答を求めた。例えば、歩道橋のジレンマでは、1) 多くの人を救うために犠牲となる大柄な人、2) 直接的危害によって助かる 5 人の作業員、それぞれに対する共感について回答を求めた。

結果

データ分布の正規性

一般的に人身的ジレンマでは、危害の肯定率がきわめて低く(= 非功利主義判断の割合が多く)、データは左すその長い分布になる。本研究においても、データの分布は正規性に従わなかったため(Shapro-Wilk の検定が有意)、分析はノンパラメトリックな解析と検定を用いることにした。また、本研究で扱う従属変数はすべて順序変数として扱う。Table1 には、歩道橋のジレンマにおける功利主義と非功利主義判断の割合をジレンマシナリオごとに示す。

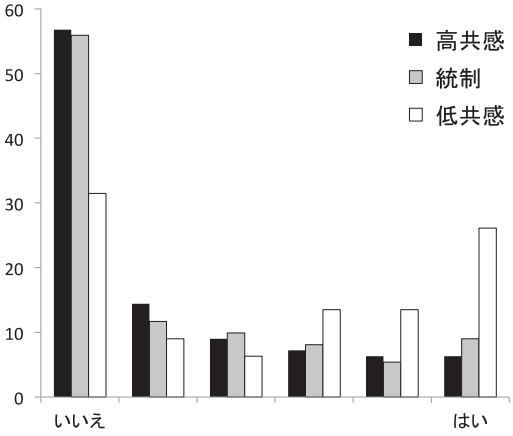

Table 1 歩道橋のジレンマにおける功利主義判断(はい)と非功利主義判断(いいえ)の割合(%)

操作チェック

ウィルコクソンの符号順位検定(対応のある 2 群)を用い、共感の操作が成功しているか調べた。高共感条件における犠牲者への共感が、他の 2 条件(統制、低共感)よりも、有意に高くなっているか調べた。結果、歩道橋のジレンマでは、大柄な人に対して視点取得するよう教示した高共感条件において、他 2 条件と比較して、共感が高くなっていることが示された(High empathy/Control: $Z = 3.69$, $p < 0.001$, effect size: $r = 0.35$; High empathy/Low empathy: $Z = 7.92$, $p < 0.001$, effect size: $r = 0.75$)。また、低共感条件では、大柄な人に対する共感が、統制条件と比較して有意に低くなっていた(Control/Low empathy: $Z = 7.67$, $p < 0.001$, effect size: $r = 0.73$)。このことから、歩道橋のジレンマでは、実験操作は成功したと言える。

救命ボートのジレンマでは、高共感条件における犠牲者への共感は、低共感条件より有意に高くなっていた(High empathy/Low empathy: $Z = 8.21$, $p < 0.001$, effect size: $r = 0.78$)。統制条件と低共感条件では、有意傾向であった(Control/Low empathy: $Z = 1.69$, $p = .092$)。一方、統制条件と比較したところ、有意差はみられなかった(High empathy/Control: $Z = 0.89$, $p = 0.38$)。このことから、救命ボートのジレンマでは、実

験操作はあまり効果的ではなかったと言える。そのため、以後の結果は歩道橋のジレンマをメインに検討していく。

共感が功利主義判断に与える影響

まず、フライドマン検定を用い、判断傾向に条件間で有意差がみられるか分析した。結果、すべての指標において有意差がみられたため、どの条件間に有意差があったか確認するために、ウィルコクソンの符号順位検定による多重比較を行った。

(a) 歩道橋のジレンマ

低共感条件と統制条件、低共感条件と高共感条件の間に有意差がみられた(低共感/統制: $Z = 6.26$, $p < .001$, $r = 0.59$; 低共感/高共感: $Z = 6.68$, $p < .001$, $r = 0.63$)。高共感条件と統制条件を比較したところ、有意傾向であった($Z = 1.74$, $p = .082$)。Figure1 は、歩道橋のジレンマにおける、非功利主義判断(いいえ)から功利主義判断(はい)の割合を条件別に示す。

(b) 救命ボートのジレンマ

すべての組み合わせの条件間において、有意差がみられた。歩道橋のジレンマと同様に、低共感条件と統制条件、低共感条件と高共感条件の間に有意差がみられた一方(低共感/統制: $Z = 4.36$, $p < .001$, $r = .41$; 低共感/高共感: $Z = 5.29$, $p < .001$, $r = .50$)、特定他者への共感を高める操作をした高共感条件と統制条件の間にも有意差が確認された($Z = 1.97$, $p < .05$, $r = .19$)。

判断者は誰に共感しているか

ウィルコクソンの符号順位検定(対応のある 2 群)を用い、判断者が各ジレンマ状況において、特定他者と助かる多くの人びとのどちらにより共感しているか調べた。

(a) 歩道橋のジレンマ

統制条件では、助かる 5 人の作業員に対する共感の方が、大柄な人に対する共感よりも有意に高かった($Z = 3.52$, $p < .001$, $r = 0.33$)。高共感条件では、有意差はみられなかった($Z = 0.72$, $p = 0.47$)。低共感条件では、助かる 5 人の作業員に対する共感の方が、大柄な人に対する共感よりも有意に高かった($Z = 8.32$, $p < .001$, $r = 0.79$)。このことから、大柄な人に共感するよう教示がなければ、人びとはジレンマ状況で助けることのできる 5 人の作業員に共感しがちなことがわかった。また、大柄な人を元受刑者とフレーミングしたところ、人びとの共感は 5 人の作業員に向けられることがわかった。

(b) 救命ボートのジレンマ

統制条件では、犠牲となるケガ人に対する共感の方が、助かる人びとに対する共感よりもやや高かったが、有意ではなかった($Z = 1.69$, $p = 0.092$)。高共感条件では、犠牲となるけが人に対する共感の方が、助かる人びとに対する共感よりも有意に高かった($Z = 2.49$, $p < .05$, $r = 0.24$)。低共感条件では、有意差はみられなかった($Z = 0.048$, $p = 0.96$)。このことから、ケガ人に対しては、共感するように教示がなくとも、助かる人びとよりも共感されることがわかった。また、ケガ人が痛みを感じる能力がないとフレーミングされても、人びとは助かる人びとと同じくらいにケガ人に対して共感していることがわかった。

以上より、ジレンマのシナリオによって、功利主義判断によって犠牲となる特定他者に共感するか、助かる多くの人びとに共感するかが一貫しないことが示された。

考察

本研究は、犠牲者に対する共感の程度を操作することで、人身的ジレンマにおける危害の肯定に影響するか調べることを目的としていた。これまでの研究は、共感のバイアスについて検討していなかった。実験操作では、非人間化と心の知覚の知見を参考にし、共感のしにくい社会的属性を犠牲者にフレーミングした(低共感条件)。また、先行研究で使用された手法を習い、犠牲者が経験する苦しみに注意を向けさせ、共感を高める操作をした(高共感条件)。犠牲者が共感のしにくい元受刑者とフレーミングされたジレンマの場合、参加者は犠牲者への危害を肯定する功利主義判断をする傾向が、他条件と比較して有意に高かった。一方、犠牲者に共感するよう教示した場合、直接的危害を肯定する傾向は低くなった。

本研究では、ジレンマの各登場人物に向けられた共感を測定し、判断者がジレンマ状況において、誰に共感を向けて危害の肯定に関する判断をしているのか調べた。結果、歩道橋のジレンマの統制条件では、助かる 5 人の作業員に対して共感が向きがちであった。一方、救命ボートのジレンマでは、犠牲となる負傷者に対して共感が向きがちであった。これにより、ジレンマの内容によって、犠牲となる特定他者に対して共感のしやすさが依存することが示唆された。犠牲となる特定他者に対する共感操作は、今回使用したジレンマシナリオ 2 つともに、功利主義判断に影響をしていたが、共感が誰に向いているかは、ジレンマ状況によって功利主義判断とは関連が低いことがわかった。

ジレンマ課題での判断はわずかな状況要因に影響を受けるため(Petrinovich & O'Neill, 1996)、厳密に状況を設定しないと結果の解釈が一様でないこともある。本研究で低共感条件に用いた操作は、特定他者の社会カテゴリーが元受刑者か負傷者かによって、意図せぬ操作をしていた可能性がある。低共感条件をジレンマ別にみた場合、歩道橋のジレンマでは判断者は助かる多くの人び

とにより共感していた。一方で、救命ボートのジレンマでは、助かる多くの人びとに共感を限定するのではなく、犠牲となる特定他者にも共感していた。解釈の 1 つとして、歩道橋のジレンマの低共感条件で、助かる人びとに共感が集中したのは、元受刑者が過去の過ちをジレンマ状況で犠牲になって償うべきだと判断者がみなしたと考えられる。また別の解釈として、意識を失っていても痛みを経験できると知覚される負傷者には共感しやすいとも考えられる(Gray et al., 2007)。このようにジレンマごとにターゲットが異なると、意図しない交絡要因によってジレンマ状況における判断が方向づけられる可能性がある。この実験操作も含め、今後の課題については次項で議論する。

今後の課題

まず、本研究では高共感条件と低共感条件が厳密には対応していなかったことが限界の 1 つとして挙げられる。高共感条件では、ターゲットに共感が向くように視点取得の教示を出した。一方、低共感条件では、ターゲットを共感しにくい他者に設定し、共感が助かる人びとに向けられるように教示を出した。このように、本研究では共感する相手の属性によって操作を試みた。しかし、シナリオによっては他と比較して共感のしにくい属性を持つターゲットが用いられていた。そこで、高共感条件と低共感条件がより対照的になるよう操作方法を工夫する必要がある。例えば、低共感条件では、助かるより多くの人びとに対して視点取得するように教示を出すことで、危害の対象となる特定他者に対する共感を低くする方法が 1 つある。今後の研究では、判断者の思考スタイルに影響を及ぼさない方法で、ターゲットへの共感を低くする操作を使用することが望ましい。

また 2 つ目に、本研究では誰に共感を感じているのか自己報告式尺度で回答を求めたが、今後の研究では、生理的指標(例:皮膚コンダクタンス, 心拍数)と合わせて検討する必要がある。自己報告で共感をする程度に変化がみられても、単に回答パタンが変化しただけかもしれない(Hepper et al., 2014)。また、ジレンマのどの部分に注意を向けているのか、より詳細に測定するのであれば、眼球運動を指標とすることが望ましい。

3 つ目に、同じ人身的ジレンマのカテゴリーに入るシナリオでも、内容にバラツキのある点を考慮する必要がある。今回使用した人身的ジレンマのシナリオ(歩道橋、救命ボート)は、功利主義判断に特定他者への直接危害がともなう点においては共通している。しかし、犠牲となる特定他者の社会的カテゴリーが異なるため、共感のしやすさもシナリオごとに変動した可能性がある。歩道橋のジレンマでは、大柄な人が犠牲者として登場するが、太った人に対する偏見のある欧米社会では(Park, Schaller, & Crandall, 2007)、他ジレンマに登場する犠牲者(例:「救命ボートのジレンマ」に登場するケガ人)と比較し、もともと共感されにくい可能性がある。この点に留意し、今後の研究では、厳密にシナリオを設定する必要がある。

最後に、本研究と同様に、ジレンマ課題を用いたこれまでの研究は、情動プロセスや共感にのみ焦点をあててきた(e.g., Takamatsu & Takai, 2016)。しかし、感情経験の乏しい人(例:サイコパシー特性、自閉症スペクトラム)が、なぜ人身的ジレンマ状況において功利主義判断をするのか説明するには、共感では不十分である。例えば、自己利益のないジレンマ状況で、他者の福利に関心のないサイコパシー特性の高い人が、多くの他者を救う功利主義判断をすることには、共感の欠如だけでなく、道徳規範に対する関心のなさが反映されている(Kahane, 2015)。つまり、結果的に同じ功利主義判断をしたとしても、モチベーションや判断材料となった理由が全く異なることが示唆される。今後の研究では共感だけでなく、判断プロセスに影響を及ぼすモチベーションや理由づけも検討する必要があろう。

引用文献

Bartels, D. M., & Pizarro, D. A. (2011). The mismeasure of morals: Antisocial personality traits predict utility responses to moral dilemmas. *Cognition*, *121*, 154-161.

Batson, C. D., & Shaw, L.L. (1991). Encouraging words concerning the evidence for altruism. *Psychological Inquiry*, *2*, 159-168.

Batson, C. D., Turk, C. L., Shaw, L. L., & Klein, T. R. (1995). Informa- tion function of empathic emotion: Learning that we value the other's welfare. *Journal of Personality and Social Psychology*, *68*, 300-313.

Choe, S. Y., & Min, K. H. (2011). Who makes utilitarian judgments? The influence of emotions on utilitarian judgments. *Judgment and Decision Making*, *6*, 580-592.

Cikara, M., Bruneau, E. G., & Saxe, R. R. (2011). Us and them: Intergroup failures of empathy. *Current Directions in Psychological Science*, *20*, 149-153.

Cipoletti, H., McFarlane, S., & Weissglass, C. (2015). The moral foreign-language effect. *Philosophical Psychology*, *29*, 23-40.

Davis, M. H., Soderlund, T., Cole, J., Gadol, E., Kute, M., Myers, M., & Weihing, J. (2004). Cognitions associated with attempts to empathize: How do we imagine the perspective of another? *Personality and Social Psychology Bulletin*, *30*, 1625-1635.

Decety, J., & Jackson, P. L. (2004). The functional architecture of human empathy. *Behavioral and Cognitive Neuroscience Reviews*, *3*, 71-100.

Gao, Y., & Tang, S. (2013). Psychopathic personality and utilitarian moral judgment in college students. *Journal of Criminal Justice*, *41*, 342-349.

Gleichgerrcht, E., & Young, L. (2013). Low levels of

empathic concern predict utilitarian moral judgment. Retrieved from http://journals.plos.org/plosone/article?id=10.1371/journal.pone.0060418
Gray, H. M., Gray, K., & Wegner, D. M. (2007). Dimensions of mind perception. *Science, 315*, 619.
Greene, J. D., Nystrom, L. E., Engell, A. D., Darley, J. M., & Cohen, J. D. (2004). The neural bases of cognitive conflict and control in moral judgment. *Neuron*, *44*, 389-400.
Greene, J. D., & Sommerville, R. B., Nystrom, L. E., Darley, J. M., Cohen, J. D. (2001). An fMRI investigation of emotional engagement in moral judgment. *Science*, *293*, 2105-2108.
Harris, L. T., & Fiske, S. T. (2006). Dehumanizing the lowest of the low: Neuroimaging responses to extreme out-groups. *Psychological Science*, *17*, 847-853.
Hepper, E. G., Hart, C. M., & Sedikides, C. (2014). Moving narcissus: Can narcissists be empathic? *Personality and Social Psychology Bulletin*, *40*, 1079-1091.
Kahane, G. (2015). Sidetracked by trolleys: Why sacrificial moral dilemmas tell us little (or nothing) about utilitarian judgment. *Social Neuroscience*, *10*, 551-560.
Koenigs, M., Young, L., Adolphs, R., Tranel, D., Cushman, F., Hauser, M., & Damasio, A. (2007). Damage to the prefrontal cortex increases utilitarian moral judgments. *Nature*, *446*, 908-911.
McAuliffe, W. H. B., Forster, D. E., Philippe, J., & McCullough, M. E. (2017). Digital altruists: Resolving key questions about the empathy-altruism hypothesis in an Internet sample. *Emotion*, Advance online publication. http://dx.doi.org/10.1037/emo0000375
大隅尚宏・金山範明・杉浦義典・大平英樹(2007). 日本語版一次性・二次性サイコパシー尺度の信頼性と妥当性の検討 パーソナリティ研究, *16*, 117-120.
Park, J. H., Schaller, M., & Crandall, C. S. (2007). Pathogen-avoidance mechanisms and the stigmatization of obese people. *Evolution and Human Behavior, 28*, 410-414.
Paxton, J. M., Ungar, L., & Greene, J. D. (2009). Reflection and reasoning in moral judgment. *Cognitive Science*, *36*, 163-177.
Petrinovich, L., & O'Neill, P. (1996). Influence of wording and framing effects on moral intuitions. *Ethology and Sociobiology*, *17*, 145-171.
桜井茂男(1988).大学生における共感と援助行動の関係―多次元共感性尺度を用いて― 奈良教育大学紀要, *37*, 149-154.
Suter, R. S., & Hertwig, R. (2011). Time and moral judgment. *Cognition*, *119*, 454-458.
Takamatsu, R., & Takai, J. (2017). With or Without Empathy: Primary psychopathy and difficulty in identifying feelings predict utilitarian judgment in sacrificial dilemmas. *Ethics & Behavior*, doi: 10.1080/10508422.2017.1367684.
van Baaren, R. B., Maddux, W. W., Chartrand, T. L., de Bouter, C., van Knippenberg, A. (2003). It takes two to mimic: Behavioral consequences of self-construals. *Journal of Personality and Social Psychology*, *84*, 1093-1102.
Vreeke, G. J., & van der Mark, I. L. (2003). Empathy: An integrative model. *New Ideas in Psychology*, *21*, 177-207.

註

1) 近年のジレンマ判断研究では、ジレンマ課題に道徳的要素は仮定されているほどはないという指摘がある(Bartels & Pizzaro, 2011; Kahane, 2015)。このことを考慮し、本稿では功利主義判断の対極を義務論判断と想定せず、功利主義判断ではないという意味合いを持たせて非功利主義判断(non-utilitarian)とした。

2) 本研究のシナリオ設定などを含めた方法、考察部分に関しては、同研究科所属の寺嶌裕登氏よりご助言を頂きました。ここに、感謝の意を示します。

The partial nature of empathy in dilemma judgment task:
Empathy with the victim predicts (non)utilitarian judgment

Reina TAKAMATSU *(Department of Psychology and Developmental Sciences, Nagoya University)*

The present study examined the effect of empathy on utilitarian judgment in sacrificial dilemmas by manipulating empathy with a victim. Results showed that participants who read a modified version of Footbridge dilemma in which the victim is described as a released convict were more willing to sacrifice him to save more people. In the empathy-inducing condition, participants performed a perspective-taking task to increase empathic concern for the victim and were less likely to make utilitarian judgment. These suggest that utilitarian judgment in high-conflict dilemmas is not only based on a calculation of greater good, but is also susceptible to interpersonal cues, such as empathy with the victim.

Keywords: utilitarian judgment, psychopathy, empathy, harm aversion, sacrificial dilemma.

付録

[ ]は、低共感条件のシナリオ操作を示す。

(1)　Footbridge dilemma(歩道橋のジレンマ)

The runaway trolley car is hurtling down a track where it will kill five people. You are standing on a bridge above the track and, aware of the imminent disaster, you decide to jump on the track to block the trolley car. Although you will die, the five people will be saved

Just before your leap, you realize that you are too light to stop the trolley. Next to you, a fat man is standing on the very edge of the bridge. He would certainly block the trolley, although he would undoubtedly die from the impact. A small nudge and he would fall right onto the track below. No one would ever know.

[You recognize this fat man from a news report that announced he had just been released from prison. Although he was convicted of sexually abusing and killing a toddler, the Court of Appeal judges overturned his manslaughter conviction and decided to release him, on account that, "The witness's---the seven-year-old's testimony is not reliable." Despite this ruling, most people still believe this man is guilty.]

(2) Liferaft dilemma(救命ボートのジレンマ)

You are on a small ship, a fire breaks out, and the ship has to be abandoned. Because your tiny life raft is carrying more than its capacity, it is sitting dangerously low in the water. The seas get rough and the raft begins to fill with water. Unless you do something, all six of you will drown. There is an injured person onboard who may die either way. If you throw him overboard, everyone else will be saved.

[The ship's doctor has given this injured person a tranquilizer that has put him into a sleep state. Given this condition, if he were thrown overboard, you can assume that he would not feel a thing. In any case, it is likely that he would die from his injury.]